

「信者の生活 2023」

私という人間は、多分、誰よりも「体育会系」と呼ばれる性格からは遠いんじゃないかと、思っています。「体育会系」ですね。上下関係がしっかりしていて、上の言う事は絶対で、下は従順かつ迅速な対応を心掛けなければならない。また、体力面でも過酷な環境に置かれることを厭わず、肉体的鍛錬を通して、精神的成長までも成し遂げようと志す、心身両面における自己研鑽ができる人たち。そんな「体育会系」。私は、上の言う事には難癖をつけ、しぶしぶ応じるような非常に扱いにくい性分で、また自分から進んで苦勞することは嫌いで、仕方なしに降りかかる試練を、どうにかこうにか掻い潜って、今日まで生きてきました。ただ、そんな私も、大学時代に、体育会系のサークルに所属していたことがあります。それは、スキーサークルだったのですが、男女の交流を楽しむようなお遊び感覚のサークルではなく、競技大会を目指して、冬夏を問わず、練習に勤しむ、とてもまじめなスキーサークルでした。その年の4月に入部して、春夏秋と基礎体力作りや、体幹強化などの練習を続けて、そして、いよいよ冬に差し掛かる11月になって、私は、このサークルを辞めました。部長さんには、だいぶ慰留されたんですが、「やっぱり無理」と思って、かなり失礼な形で、私は去ることになりました。今思えば、その時の部長さんも、立場上つらかったろうなあ、と。

スキーサークルを「やっぱり無理」と思ったのは、そういう体育会系な組織に馴染めなかったということもありますが、正直、単純に練習がきつかったという、情けない理由もあります。例えば腕立て伏せをする時に、先輩から「じゃあ、30回で」と回数を指定されるのですが、1回、2回、3回と数えていって、24、25、26となる頃には、もう苦悶の表情で必死になっています。そして、

「ようやく終わる」と思っていると、27、28、29、29、29、29・・・と、先輩のやりたいだけ続いていくという。指導熱心と言うか、私から言えば、そんなもん意地悪なだけですけど、そういう先輩の非常に有り難いご指導の数々に、「やっぱり無理」と思ったわけです。そういう鍛錬って、私は苦手なんです。もう仕方ないと思っています。

「終わりの見えない苦勞」って、多分、あらゆる試練の中で、最も人の体力と精神力を削るものだと思います。たとえ、同じ40回という苦勞を与えられるとしても、最初から40回と分かっている場合と、30回よりは先は分からない場合と、取り組む時の覚悟やストレスは必ず違ってくるでしょう。余談ですが、それは、「終わりの見えない説教」ということに当てはまるかも知れません。

「この説教、いつ終わるんだろうか・・・」という、忍耐の時ですね。余計なことを言いました。つまり、先が見えるなら、算段をつけ、配分を考えて、心積もりができます。けれど、先が見えなければ、ただただ心を消耗し、代わりに疲労を溜めていくばかりです。もっとも、その分、筋肉や精神が鍛えられると言えるのかも知れませんが、でも、それは、そういうトレーニングが好きな人が続ければ良いことで、「そんなの耐えられない」と思う人に、「終わりの見えない苦勞」を強いるのは、私はあまり良いとは思いません。

実は、今日の聖書箇所は、言うなれば、40回というゴールが定められた中での腕立て伏せ20回目という段階を耐え忍んでいる人たちのお話です。どういう事かと言いますと、ここに書かれている「信者の生活」とは、「世の終わりは、直ちにやってくる、ゴールはもうすぐだ」という信仰と確信があった時代のお話だという事です。あと腕立て伏せを20回やれば、あと半分やれば、終わりが来る、40回というゴールを達成できる、という見通しがある中での「信者の生活」だったということです。

「さあ、皆さん、神様の国は、もうすぐにでも実現します。終末はやってきます。だから、すべ

ての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのこの必要に応じて、皆でそれを分け合しましょう」となったんですね。そして、働く必要はなく、ただ「毎日ひたすら心を一つにして神殿に参りましょう。パンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美しましょう」と。約 2000 年前の「信者の生活」は、このような「終末がすぐ来る」という信仰的背景をもって営まれてきました。

「もうすぐ世界は終わるんだから、財産なんて持ってても仕方ない。働いたって仕方ない。それより神殿に参って祈ろうじゃないか」と。しかし、ここに大問題が起こるのです。すぐ来ると思っていた終末は、その見立てに反して、待てど暮らせど、やってこない。「もうすぐ、直ちにやってくる」と信じていたのに、その兆しは幾度かあれど、実際の到来は全然見通せない。キリスト教神学で言うところの「終末の遅延」という大問題が起こったのです。当時の信仰者にしてみれば、つらい腕立て伏せを、38 回、39 回と続けていき、もうちょっと 40 回だと思っているところで、39 回、39 回、39 回・・・と、数字が繰り返すような感じです。これは、かなりの不安と負担を強いたと想像します。だから、「もうすぐゴールだ」と思いながら、「信者の生活」を続ける中で、次第に、彼らは疲れ果てていきました。そして、世代を重ねるごとに、腕立て伏せのような「信者の生活」をすることもやめてしまいました。そして、ここにいる私たちが、現代の信仰者として生きています。私たちは、もう今日の聖書箇所のような「信者の生活」はしていません。

現代のキリスト教の中には、聖書的純粋という旗の下で、今日の聖書箇所のような生活様式を蘇らせ、そういう生活を営む人たちもいます。しかし、この「信者の生活」は、キリスト教の歴史の中で、確かに廃れていったのです。「終末の遅延」という、人間にはいかんともしがたい大問題が起こったことを受けて、過去の信仰の先達たちは、祈りつつ、神様の御心に尋ね求めながら、捨てることを選択した、そんな「信者の生活」なのです。だから、今になって、「よし、この聖書に書かれている通りに生活しよう、そして、民衆全体から好意を寄せてもらおう」なんて考えるのは、

やっぱり可笑しいんですね。

「いや、別に、今日の聖書箇所“信者の生活”をしたいと思ったことなんて、これっぽっちもない」と思われるかも知れません。でも、そんな私たちも、この聖書に日々親しみ、教えられることで、「聖書に書かれているから、こうすべきである」と感じてしまうことはないでしょうか。もちろん、私たちにとって聖書は拠るべき唯一の聖典であり、信仰の基礎であります。私たちは、聖書から、神様の御心と、イエス様の福音を聴くことが何よりも大切です。それは否定してはいけない信仰の要です。ただ、そんな信仰の基礎である聖書に書かれている「当時を生きた信者」の気持ちを考えてみたら、どうでしょうか。今日の聖書箇所「信者の生活」をしていた人たちは、いったい、どこに目を向けて、何を思い描いて日々を生きていたのでしょうか？ 旧約聖書に書かれた、さらに古い時代を志して生きていたのでしょうか。過ぎ去った日々を思いを寄せて、懐かしみながら生きていたのでしょうか。きっと違うと思います。彼らは、まだ見ぬ未来に向けて、神様の国が完成するという終末に思いを寄せながら、必死になって、その日が来ることを祈りながら生きていたと思います。つらい腕立て伏せのカウントに終わりが見えない中で、なお、諦めず、未来にゴールは絶対に備えられていると信じて、1日1日を生きていたと思います。私たちが学ぶべきは、そういう「祈りながら未来に期待する」信仰の姿勢なのだと、私は思います。

私たちは、何度も言うように、決して今日の聖書箇所の「信者の生活」をしたら良いわけではありません。それは廃れた生活様式であるし、何より、私たちにとって神様の導かれる未来を見据えていないからです。私たちが目を向けるべきは、昔の生活や、昔の日々ではなく、これからの未来です。「この先、いつか終末がやってくる」という最終目標を、私たちも信仰のうちに思い描きながら、明日の信仰生活を考えていくのです。今日の聖書箇所に出てくる信者たちは、「すぐに終末は来る」と信じて、従来の生活から離れて、新しい生活へと入っていきました。それは結局、実を

結ばない生活でしたが、でも、彼らは未来のために、過去と別れて、自分たちの現在を変えていったのです。新しく共同生活を始め、物を共有し、財産を売って分け合う、そんな新生活を始めたのです。では、終末の到来が遅れていることを知っている私たちは、「終末の遅延」という現実の中を、どう生きていけば良いでしょうか。私は、今日の聖書箇所にある「信者の生活」の逆をすべきだと思っています。つまり、「終末はすぐ来るから、もうこの世のことに関心を持たない」のではなくて、神様の御心によって、終末は遅れているのだから、この遅れている間に、もっとたくさんの仲間を加えよう、そのために、祈りながら私たちのこの地上での未来計画を考えよう、ということです。1日でも長く、今の信仰生活を続けることができるように。一言でも多く福音を宣べ伝えられるように。一人でも多く、救われた恵みを知ってもらえるように。私たちは、自らの生活を整え維持しながら、なかなかやってこない終末までの日々を、急がず、焦らず、でも真剣に生きていくのです。

「聖書から学ぶ」と言うのは、何も「聖書に書いてある通りに生きる」ことではありません。「聖書の時代から続く知識と経験を受け継いで、今を生きる」ということです。この敦賀教会も、コロナ禍を巡る社会情勢の変化を切っ掛けとして、これからの日々を考えていかないといけません。教会のすべてをコロナ前に戻すべきなのか、それとも、教会員の人数や年齢層を踏まえて体制や行事を変えていくべきなのか。2000年の前の信者たちが「終末はすぐに来る」という課題を与えられて、選択を迫られたように、「終末の遅延」の中を生きる私たちには、私たちの課題が与えられ、選択をしていかないといけません。そして、その選択は、私たち自身のためであると同時に、次世代を担う次の信仰者のためでもあります。

ね。すぐに終末が来てくれるなら、次の信仰者なんて考えなくてもいいんですが、神様のせいで、これが遅れているのだから、そういうわけにもいきません。

これからも私たちは、しっかりと聖書を開いて、これに耳と目を注ぎつつ、新しい「信者の生活2023」をご一緒に考えて参りましょう。「こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである」という御言葉も、私たちの未来に備えられた福音であることを心に留めつつ、最後にお祈りを致します。

神さま。

今日も、私たちのために、尊い安息日を備えてくださり、感謝致します。大昔の信仰者たちは、あなたの国が実現する日を見誤り、きっと不安で苦しい日々を過ごしたのだと想像します。しかし、その過ちさえも聖書に書き残し、今を生きる私たちに信仰生活の指針を示してくれています。かつての信仰者が、たとえ見誤ったのだとしても、戻らぬ過去ではなく、あなたの導かれる未来を見据えて終末に備えたように、私たちも、これから先の未来に思いを向け、自身の信仰について、教会について、来る次の世代について、考え、祈り、行動することができますように、どうか支え導いてください。

このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。

7月召天者を憶える祈り 聖書：詩編 23 編

主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない。

主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴ひ

魂を生き返らせてくださる。主は御名にふさわしく、わたしを正しい道に導かれる。

死の陰の谷を行くときも、わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。あなたの鞭、あなたの杖、それがわたしを力づける。

中野寿栄子姉	なかの すえこ し	(2012年7月2日)
幸田栄三兄	こうだ えいぞう けい	(1970年7月5日)
寺谷秋男兄	てらたに あきお けい	(2008年7月15日)
大澤曾岑姉	おおさわ そね し	(1987年7月19日)
高木光男兄	たかき みつお けい	(2005年7月20日)
大竹敏雄兄	おおたけ としお けい	(2015年7月24日)
高山孝子姉	たかやま たかこ し	(2022年7月25日)
島 洋子姉	しま ようこ し	(1934年7月28日)
牧野リリー姉	まきの りりー し	(1949年7月29日)
増田一美姉	ますだ ひとみ し	(2016年7月29日)
柴田辰雄兄	しばた たつお けい	(1992年7月31日)

神様。6月の最後の礼拝。この敦賀教会では、主の体の枝となられた敬愛すべき兄弟姉妹のことを覚えて祈りを合わせています。あなたは、ご自身のことを証しするために、主イエス・キリストをこの世へとお与えになり、そして、その後も、主に従う多くの方々を聖別し、教会を担う器として祝福してくださいました。今、私たちは、この敦賀教会を担い、敦賀教会のことを憶えて祈りを捧げられた10名の信仰の先達に感謝と平安を祈り願います。どうか、世の終わりの時まで、7月の召天者の方々の魂が、あなたによって守られ、その生涯の道なりに相応しい、十分な恵みと慈しみで満たされますように。祈ります。

この祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。